

日本におけるジャック・ロンドンの再評価

芳川 敏博(京都府城陽市)

日本におけるロンドンの作品の影響を、中田幸子氏は『父祖たちの神々』の「はじめに」などで次のように総括している。

- 1) 第1の時代は、ジャック・ロンドンという名前が初めて日本に雑誌『太陽』に現れた1902年(明治35年)から、彼の没年である1916年(大正5年)までである。ロンドン自身来日しているが、読者大衆は『荒野の呼び声』も『ホワイト・ファンク』もまだ知らない。
- 2) 第2の時代は、ロンドンの死にきびすを接して世界大戦が終了し、文字通り新しい時代に入ったところから始まる。この時代は、社会不安、経済不安に加えて、政治的弾圧強化の時代であるが、世は民衆運動に揺れ、社会主義の流行を見た。大正デモクラシーの時代、一般民衆が時代の表面に姿を現し、それが、文学・芸術の分野で「大正期の人民的、革命的な文学動向」となったまさにその時期に、ロンドンは日本で大流行した。これは、具体的には堺利彦訳『野性の呼び声』でロンドンに接するようになる。そして、『白い牙』というような極北動物文学の作品をはじめ、『奈落の人々』(『どん底の人々』)や『鉄の踵』というような社会主義の作品なども読まれるようになった。ロンドンは、「人間を愛する」という素朴な動機によって社会主義を説き、人間の幸福に関する発言を残したが、この点で日本人は彼に共感するところが大きかった。この時期はロンドンが時代の精神そのもののような強烈な主張や説得で人々の心をつらえた。
- 3) 戦後の第3の時代が始まると、復活したアメリカとの関係のもとに大きくなったアメリカ文学への関心の一端として、ロンドンも脚光を浴びることになる。ロンドンの『荒野の呼び声』『白い牙』は、古典的名著として不動の位置を獲得した。ロンドンは、彼の描き出す人間や自然や物語の魅力によって、人々の心に安住の場所を獲得したが、この時期の作品は主にこれらの2作品に限られた。
- 4) ロンドンの生誕100年にあたる1976年を中心に、欧米では彼を再評価する動きが盛んであったが、この現象は日本でも見られ、彼の作品選集(原点の復刻)24巻の刊行(1989年、本の友社)という快挙に結実している。第4の時代と言える。

日本においても1970年代に入り、ジャック・ロンドンとその多くの作品が紹介されるようになり、再評価の機運が増してきた。辻井栄滋氏を中心に『野性の呼び声』や『白牙』以外にもいろいろな分野で数多く翻訳され、日本ジャック・ロンドン協会やその読書会を中心に一般の人々にも知られるようになった。また、社会的・時代的背景については中田幸子氏や辻井栄滋氏の著書に負うところが大きい。しかし、ロンドンの220篇のフィクションが全て日本に紹介されているわけではない。特に、ロンドンが作家になる前の作品や死後に出版された作品は、あまり知られていない。

以下に、日本におけるロンドンの第4の再評価について、関連事項を箇条書きにする。日本における第5のロンドンの再評価を考える上での参考にして頂ければ幸いである。ロンドンの生誕100年から第4の再評価が始まったことを考えると、ロンドンの没年である1916年から1

00年後の2016年に第5の再評価が始まればと考えている。そのためにはどういう条件や努力が必要であるか考えたい。今までとは異なったロンドンの側面にスポットライトがあたるとよいと思う。

- 1976年・・・『星を駆ける者』、森美樹和抄訳、国会刊行会
(ロンドン生誕100周年行事が開催される。)
- 1976年 アメリカのジャック・ロンドン財団(Jack London Foundation)設立と同時にホームページも開設される。
<http://jacklondonfdn.org/>
(ロンドンに関する資料の保存と研究を目的に設立され、セミナーや読書会を開催したり、高校生のための作文コンテストも主催する他、会報を発行している。)
- 1977年・・・『馬に乗った水夫』、橋本福夫訳、ハヤカワ文庫NF
- 1981年・・・『ジャック・ロンドンとその周辺』、中田幸子著、北星堂
- 1983年・・・『ジャック・ロンドン大予言』、辻井栄滋訳、晶文社、「強者の力」1911、「ミダスの手先」1901、「スロットの南側」1909、「ゴリア」1910、「デブスの夢」1909、「全世界の敵」1908、「比類なき侵略」1910、「奇異なる断章」1908、「背信者」1906
- 1985年・・・『どん底の人びと』(『奈落の人々』(*The People of the Abyss*))、辻井栄滋訳、社会思想社・現代教養文庫
- 1986年・・・『ジャック・ロンドン自伝的物語』(*Martin Eden*)、辻井栄滋訳、晶文社
(辻井栄滋氏が、外国人としてはじめて、「ジャック・ロンドン・マン・オブ・ザ・イヤー賞」をアメリカのジャック・ロンドン財団より受賞)
(ロンドンの肖像切手が、生誕110年を記念して、米国郵政公社から発売された)
- 1986年・・・『ジョン・バーリコーン』辻井栄滋訳、社会思想社・現代教養文庫
- 1987年・・・『試合』(「試合」「ひと切れのピフテキ」「メキシコ人」「奈落の獣」、辻井栄滋訳、社会思想社・現代教養文庫)
- 1986年・・・『鉄の踵』小柴一訳、新樹社
- 1988年・・・『死の同心円』井上謙治訳、国会刊行会、「マプヒの家」「生命の掟」「恥っかき」「死の同心円」「影と光」
- 1988年・・・*The Letters of Jack London*, ed. Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard.
- 1989年・・・英米文学研究書『ジャック・ロンドン』、ジャック・ロンドン研究会編、『野性の呼び声』、『海の狼』、『白い牙』、『鉄の踵』、『マーティン・イーデン』『いのちへの愛』、『奈落の人びと』
- 1989年・・・*The Works of Jack London*, 復刻版全24巻、本の友社(監修:大浦暁生、辻井栄滋、ラス・キングマン)、別巻『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』(ラス・キングマンの*A Pictorial Life of Jack London*の翻訳)、辻井栄滋、本の友社(同時にこれは別仕立てで市販)
- 1990年・・・アメリカのThe Jack London Society 設立。
ホームページ: http://london.sonoma.edu/Organizations/jl_society.html
(ロンドンと作品研究を目的に設立され、約200名の会員がいる。2年に1度のシンポジウムの開催と年2回の会報誌の発行を行っている。)
- 1991年・・・『父祖たちの神々——ジャック・ロンドン、アプトン・シンクレアと日本人』、国書刊行会
(森孝晴氏が、日本人として2人目の「ジャック・ロンドン・マン・オブ・ザ・イヤー賞」を米国ジャック・ロンドン財団より受賞)
- 1992年・・・米国ジャック・ロンドン協会第1回大会

- 1992年・・・『アメリカ浮浪記』（*The Road*）辻井栄滋訳、新樹社
- 1993年・・・日本ジャック・ロンドン協会設立（6月19日）
全国大会開催、ニューズレター『呼び声』発行。
- 1993年・・・*The Complete Short Stories of Jack London*, ed. Earle Labor, C. Leitz, III, and I. Milo Shepard.
- 1994年・・・『太古の呼び声』（*Before Adam*）辻井栄滋訳、平凡社
- 1995年・・・『赤死病』（*The Scarlet Plague*）辻井栄滋訳、新樹社
（日本ジャック・ロンドン協会京都支部読書会・鹿児島支部読書会発足）
- 1996年・・・『海の狼』（*The Sea Wolf*）関 弘訳、トパーズプレス
- 1998年・・・『極北の地にて』辻井栄滋・大矢健訳、新樹社（「極北の地にて」「生の掟」「老人たちの結束」「千ダース」「生命にしがみついて」）
- 1998年・・・『椋鳩十とジャック・ロンドン』森孝晴著、高城書房
- 1999年・・・『アメリカ残酷物語』辻井栄滋・森孝晴訳、新樹社（「まん丸顔」「影と光」「豹使いの男の話」「ただの肉」「恥さらし」「支那人」「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」）
- 1999年・・・『読み解かれる異文化』中央英米文学会編、「ジャック・ロンドンとカリフォルニア」小林一博
- 1999年・・・*Jack London International* というドイツのJ・ロンドン研究者によるページ（ロンドンの紹介、論文、ロンドンとのインタビュー等）（英語とドイツ語）。<http://www.jack-london.org/index.htm>
- 2000年・・・（日本ジャック・ロンドン協会四国・中国支部読書会発足）
- 2001年・・・『地球の作家ジャック・ロンドンを読み解く』辻井栄滋著、丹精社、（「習作期における作品」「*The Yellow Peril*」『野性の呼び声』『白牙』『生の掟』『*Story of a Typhoon Off the Coast of Japan*』『社会派SFもの』『どん底の人々』『マーティン・イーデン』『J・ロンドンに仕えた日本人たち』『ジョン・バーリコーン』『ボクシングとJ・ロンドン』『アメリカ浮浪記』『太古の呼び声』『赤死病』『極北もの短編群』（日本ジャック・ロンドン協会初の *Essays on Jack London and His Works* 発行）
- 2001年・・・『ジャック・ロンドン——人・文学・冒険』深沢広助著、北星堂書店、『野性の呼び声』『海の狼』『白い牙』『鉄のかかと』『マーティン・イーデン』『焚火』『生命の掟』
- 2001年・・・『野性の呼び声』辻井栄滋訳、社会思想社・現代教養文庫
（日本ジャック・ロンドン協会主催の第1回「J・ロンドンへの旅」はじまる。）
- 2002年・・・『白牙』（*White Fang*）辻井栄滋著、社会思想社・現代教養文庫
- 2003年・・・日本ジャック・ロンドン協会のホームページ開設。http://www2d.biglobe.ne.jp/~to_yoshi/JLJAPAN.htm
（当協会の活動等やジャック・ロンドンと作品紹介、リンク集などが紹介されている）
- 2005年・・・『決定版ジャック・ロンドン選集1・2・3』辻井栄滋訳、本の友社
- 2005年・・・『二十世紀最大のロングセラー作家—ジャック・ロンドンって何者？』辻井栄滋著、丹精社
- 2005年・・・『日露戦争研究の新視点』日露戦争研究会編、「ジャック・ロンドンと日露戦争」橋本順光
- 2006年・・・『南国物語』深沢広助、春風社、「マプヒの家」「鯨の歯」「マウキ」「ヤァ！ヤァ！ヤァ！」「異教徒」「恐ろしいソロモン諸島」「大胆不敵な白人」「マッコイの子孫」
- 2006年・・・『決定版ジャック・ロンドン選集4・5・6』辻井栄滋訳、本の友社、
（今までの訳書に次のエッセイを追加）「競争制度によって社会から失うもの」「いかしにて私は社会主義者になったか」「革命」「私にとって人生とは何か」
（今までの訳書に次の短編も追加）「さよなら、ジャック」「ハンセン病患者クーラウ」「椿阿春」

「原始時代にかえる男」

- 2008年・・・『火を熾す』柴田元幸翻訳叢書、柴田元幸訳、スイッチ・パブリッシング（「火を熾す」「メキシコ人」
「水の子」「生の掟」「影と閃光」「戦争」「一枚のステーキ」「世界が若かったとき」「生への執着」）
- 2008年・・・『ジャック・ロンドン幻想短編傑作集』有馬容子訳、彩流社（「夜の精」「赤い球体」「コックリ占い板」
「古代のアルゴスのように」「水の子」）
- 2008年・・・『ジャック・ロンドン カリフォルニア紀行』辻井栄滋著、明文書房
- 2009年・・・『ジャック・ロンドン讃歌』辻井栄滋監修・編集（執筆者は、日本ジャック・ロンドン協会各支部読書会所属
の会員22名）、明文書房（「生の掟」「まん丸顔」「老人たちの結束」「極北の地にて」「影と光」「野性の呼び
声」「生命にしがみついて」「白牙」「マーカス・オブライエンの行方」「恥さらし」「支那人」「メキシコ人」「ジ
ョン・バーリコーン」）